
異世界に刃物少年がやってきた

竜人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に刃物少年がやってきた

【Nコード】

N9256H

【作者名】

竜人

【あらすじ】

この物語は刃物をこよなく好きな少年（と銃が好きな女性）が魔法やら魔物やら妖精がいる異世界にやってきて、騒動をおこしたり、解決する物語です。

00 きっかけ

ト
ト
ト
ト
ト

ど〜も〜俺の名前は黒宮真 クロミヤシン ぴっちぴちの17歳
趣味は刃物集めとそれらを使いこなすことだ。さて今なにをし
ているかというと……

？

「その少年止まりなさい！！」

真

「止まるか〜！〜！！」

警察の人から逃げています。何故こうなったかと言うと昼休みのこと
だった。

〜〜回想〜〜

昼休み、俺は学校に持ってきた我がコレクションの手入れした後、
ドアにダーツの的を掛け、そこにサバイバルナイフを投げて暇を潰
してた。でもそこに……

ギイイ

男子

「誰かいんの？」

人が入ってきた。その時、ちょうどサバイバルナイフを投げている
ので、

グサツ パタン

額に刺さり絶命させてしまった。

真

「どうしよう?」

といいながら俺は男子の額からサバイバルナイフを抜き、血を拭っていた。というか人を殺したという罪悪感が全然なかった。うん俺、殺人鬼の素質あるかも?と思ってたらいつの間にか、不良っぽい奴らが来た。

不良A

「おいおいなんで金づるのコイツが死んでんだよ?」

不良B

「おいお前、お前がこのチビメガネ殺したのか?」

真

「そうだけどそれが?」

と親切に教えたら不良どもがぞろぞろ出てきて約15人ぐらいいる。しかも全員鉄パイプ所持。

不良A

「全員やっちまえ!!」

と掛け声と共に不良どもが襲い掛かってきた。さすがにヤバいので竹刀袋で隠して持ってきた。刀を鞘から抜き、居合い斬りの要領で不良の一人を斬った。

ズサアアツ

するとおびただしい量の血が吹き出し、上半身と下半身が離れた。

不良A

「お前、やれ仇討ちだ!!」

いや退けよ不良。刀と鉄パイプじゃ刀勝つから。

数分後、結局俺は最初の奴含めると16人殺してしまった。まあどうでもいいと思う自分があるわけで、

真

「~~~~~」

鼻歌を歌いながら刀の手入れをしていた。でもそこにガタツ

うちのクラスの委員長が来てしまったので

委員長

「キャアアアアー!!」

~~~~~回想終了~~~~~

というわけで今、非番で休み中という感じの私服姿の女警察官がパトカーから逃げているけど

真

「なんで警察官がトカレフを発砲してんだよ!？」

?

「あんたが逃げるからよ!?!つかこれ私の趣味で集めたやつだから」

真

「完璧、銃刀法違反してんだる警察官が!！」

?

「刑事課の特権よ」

真

「そんな理不尽な!？」

「言い合いをしていると、

プスプス シュ〜

?

「エンスト!？」

真

「ラッキ〜」

?

「逃がすか!！」

とエンストしたパトカーから女警察官が降りてきてしかも

真

「なんで銃が二丁になってんだよ!?!しかも増えたやつデザートイ  
ーグルだろなんであんたが持ってんだよ!?!」

？

「ロシア系マフィアに横流しして買ったの」

真

「ぜってー犯罪だ。警察官がやってどごす。つか捕まえるよマフ  
イアー！」

と言ったその時、

ズルッ

真

「へっ？」

下を見ると

真

「崖ええええ〜!？」

と俺は呆気なく落ちて行った。けど

？

「待てえええつて崖ええええ〜!？」

と女警察官が落ちてきやがった。

真

「お前バカだろおお〜!!」

〜数時間後〜

あゝまだ落ちてます。つかいい加減、地面見えるよ。全く女警察官が？

「ぎゃあああゝ」

と今現在進行形で叫んでうるさいのだが

ピカアアー

なんだいきなり下から光が！？

と目を閉じるといつの間にか地面に座ってる感覚があったので目を開けると、

真

「ええゝ」

そこは樹海だった。

続く

## 01 樹海にて

真

「はあ〜」

ど〜も黒宮真です。いきなり樹海に着いて、数分経ちました。まあその時間は女警察官と自己紹介していたんだけどね。つか銃の自慢話で長かったけど(汗)  
女警察官の名前は白宮理名 シロミヤリナ 歳は23の新人らしい。  
でもな

真

「白宮、あんた本当に23歳？」

理名

「なっ！！失礼な、老けてるってことか!？」

真

「逆だ、若すぎるんだろど〜みても高校生にしか見えん」

理名

「ありがと」

うんやっぱ高校生にしか見えね〜。長くて綺麗な漆黒の髪、子供ばさがる茶色い目。

理名

「お〜い真君どうした？」

真

「いやっ別に（汗）」

危ね〜、あんたを見てたなんて言えね〜よ

理名

「まあいいけどさ、所持品確認しない？」

真

「そっだな」

黒宮真 所持品

学生鞆

中身 サバイバルナイフ5本 包丁2本 小刀4本 ダガーナイフ3本

エナメルバツグ

中身 ナタ6本 サバイバルナイフ5本 クナイ4本 カロリー

メイト9個

竹刀袋

中身 刀（銘 月姫）

ポケット

中身 生徒手帳

理名 「あんた、本当に高校生？（汗）」

真

「正真正銘の高校生だ。つかあんたの所持品は？」

理名

「えとホレ」

白宮理名 所持品

ボストンバツク

中身 トカレフ2丁 デザートイーグル2丁 マシガン2丁  
ボルトタイプのスナイパーライフル2丁 弾倉56個

ポケット

中身 トカレフ1丁 デザートイーグル1丁 弾倉2個

真

「なんで食料ねえ〜んだよ!！」

理名

「いや普通もたないしだいたいそんな金あつたら銃を買いし」

と白宮は胸を張って言いやがった。

真

「あつそうかい。今更だが警察官になつた理由は？」

理名

「もちろん銃を包み隠さず使つたためだ!！」

「うわ〜最悪な理由だな。」

真

「取り敢えず状況確認だな」

理名

「あのさなんで真君が上目線なの？」

真

「あんにまかせられないから」

理名

「うっ！！」

凶星かよ

真

「まっいいか。まずここは樹海である。そのため人がいない可能性が高い。そして、疑問がある。」

理名

「何？」

と近づいてくる白宮つか

真

「顔、近けくんだげど」

理名

「わりっ／＼／」

真

「で話しに戻るけど、上をみる」

理名

「上？ってなんじゃこりゃああ〜!?!?」

真

「いちいちジーパンの刑事の有名なセリフを叫ぶな!?!全く。まあつまりは空には二つの月があり、一つは赤、もう一つは青、つまり、もとの世界にはない。」

理名

「つまり」

真

「ここは異世界かも知れない。」

理名

「ありえねえ〜!?!」

と白宮は叫んで近くの大木に肘打ちをすると

バキッ ドツカ〜ン

大木が折れて、倒れた。

真

「あのさ白宮、お前てそんなに力あったんだ。(汗)」

理名

「ないって」

と首を横にブンブン振る。その時、

グキヤアアア

真 理名

「誰!?!」

と後ろを二人同時に見ると

グルルル

約ビル4階分の三つ目の熊がいました

真

「って呑気してる場合か!?!」

と俺は刀を抜き、構えをとる。と急に三つの銃声が鳴り響いた。

理名

「全弾命中」

そう白宮である。まあ当然なんだが、で三つ目熊を見ると目が全部潰れていて苦しそうにしていた。そこで俺は一気に跳躍し、三つ目熊の真上まで行き、(ジャンプ力が驚異的に上がっているのに内心びっくりした)刀を振り下ろした。そして三つ目熊は紫色の血を吹き出しながら縦に真っ二つになった。

真

「白宮。これで確定した。」

理名

「何が?」

真

「俺らは異世界にきた」

と俺は軽いため息をした時、

？

「お〜い」

と人の声が聞こえ、そちらの方を見ると、

？

「見つけましたよ。異世界の住人さん」

ショートカットの銀髪美少年がいた。

続く

## 02 山小屋にて

どうも黒宮真です。さて今はある山小屋にいます。実はあの時きた、銀髪美少年の家であります。ここに来るまで自己紹介とこの世界について話してくれました。

彼の名前はアレン・ウォルカ 歳は16ということだ。なんか突っ込みたくなった。

でこの世界はフリーディアという名で簡単に言ったら魔法あり、魔物あり、妖精ありな世界らしい。

真

「で俺らがこの世界に召喚された理由は」

アレン

「はい、実はこの世界には二つの月があり、本来1日交代で出るのですが、千年に一度だけ二つ一緒に出ます。その日のみ二つの月の膨大な魔力を借り、『異空間召喚魔法』が使えます。この世界ではその魔法を使い、異世界人を呼ぶのが習わしで、今回、君らの見つける役目が僕に来たわけです。」

理名

「じゃあ元の世界に戻れないのね」

アレン

「スミマセン。勝手に召喚されたの戻れないなんて」

真 理名

「「いいじゃん」「」

アレン  
「へっ？」

真  
「だって俺、元の世界では犯罪者だし」

理名  
「こっちやったら銃を好きなかだけ使えるし」

アレン  
「あっありがとっございませすー!!」

真  
「いいって」

理名  
「でアレン君、質問なんだけど」

アレン  
「何ですか？」

理名  
「この世界、魔法があるんだよね？」

アレン  
「はい」

理名  
「じゃ私達魔法使えるの？」

アレン

「まあ使えますね。けど人それぞれで使える魔法系統が違います。」

アレン

「例えば、僕の場合は変化タイプの強化魔法が使えます。『ヘルブレイカー』」

と技名？を言うのと左腕が光り、銀色の鋭い爪を備えたものになった。てか神の○化ぶっっちゃけ形状は。突っ込みて」

アレン

「あ〜?」

真

「あつすまない。そういえば呪文みたいな詠唱しなくていいのか？」

アレン

「いえ魔法は呪文というものはありません。しかし発動するには起動キーとして魔法名称を宣言しないとけません。あつそれから魔法は自分の系統に合わせて自分で作ってください。」

真

「へ〜後、魔法は自分で作るんだ。って自分で作るのかい!!」

理名

「真君、楽しそうでいいじゃん」

アレン

「ハハハッ（汗）ではこれを」

とアレンが飴を差し出してきた。

真

「それは？」

アレン

「『覚醒飴』です。これで魔法を覚醒できます。」

なるほど。で俺らは飴を口に含むと、すぐに溶けた。

真

「ってこれだけ？」

アレン

「はい。もう二人とも覚醒しました。」

理名

「なんでわかるの？」

アレン

「実は僕、左目に呪いがかかってて相手の魔法系統がわかるんです。」

呪いの左目ってうわ〜突っ込みたい。

アレン

「で二人とも珍しい系統ですよ」

真

「珍しいのか？」

アレン

「はい。まず黒宮さんは五大元素の全ての魔法が使えます。普通は五大元素のうちのひとつだけなんですよ。」

真

「五大元素ってなんだ？」

アレン

「火・水・風・雷・土の五つです」

理名

「私は私!？」

真

「だいの大人がはしゃぐなよ」

アレン

「え〜と(汗)一応白宮さんは呪式となります」

理名

「ジユシキ？」

アレン

「はい、呪式です。この系統は二千五百万分の一の確率でしかこの世界にはいないんですよ。で内容的に相手に状態異常をさせたり、味方の身体能力を上げたりできます。後、最近の研究で呪式の力を込めることで材料があれば魔法薬を作れるとわかりました。」

うわっー 一番魔法使いっばい。 あっ

真

「そしたらアレンの左目の呪いってもしかして呪式の魔法？」

アレン

「まあ（汗）実は僕の母が呪式系統で【ちょっと実験台になって】と強制的に掛けられてこの結果に（涙）」

サイテーだな。

アレン

「そっそんなことより実は5日後、レナーナ学院の入学試験があります。」

真

「もしかして」

アレン

「はい二人には入学試験を受けてもらいます。」

真

「やっぱり」

と俺はうなだれたのだが、

理名

「年齢制限は？」

アレン

「ありません。しかも体育の時間、魔物と戦ったり決闘したりするから武器を使い放題ですよ」

理名

「受けます!!」

うわっ 白宮、目がキラキラしてるし。銃を使えるだけで。あんた2  
3歳だろ

真

「はあ」

アレン

「黒宮さんため息つかないください。大丈夫です。僕も受けま  
すし、今日から4日間魔法の修行頑張りましょう!!」

真

「待て、魔法の修行ってなんだ!?! ちょっと話しを聞け!!」

と、とつても不安な異世界での生活が始まった。

続く

### 03 入学試験にて

グルルル

真つ黒の体皮、三つの頭、口から溢れる炎

試験官

「君らには別名、地獄の番犬。ケルベロスと殺しあってもらう。」

真

「はあ〜!?!」

ど〜も〜黒宮真です。さてなぜこうなったかということ  
〜〜回想〜〜

あれから5日後、（修行で俺と白宮は異世界にきた特典として身体能力が何倍にも上がったに気付いた）俺らはレナーナ学院に来ていた。

真

「来たのがいいが」

理名

「デカイね〜」

アレン

「はい。ここフリーディアでは一番大きい学院ですから。」

とはいっても見た目城じゃん（汗）あれかホグーツなのか!?!

アレ

「え〜と黒宮さん？（汗）」

真

「ハッ！あゝ悪いちよつと考えごとしていた。」

アレ

「ならいいんですが、試験の説明したいので」

真

「いいぜ」

アレ

「はい。今回の試験は試験官が召喚した魔獣を倒すということですが、今年から四人一組で受けなきゃならなくて」

理名

「四人だつたら楽勝じゃん」

でせめて銃を手入れをしないで言えよ。

真

「あれっ？俺ら、三人しかいなくね」

アレ

「だから困ってるんですよ」

理名

「なああああゝ！！」

真

「いちいち騒ぐな！！」

？

「あの〜そしたらあつあたしと組みませんか？」

真理名 アレン 「「「本当!?!?!」」」

と振り向くと

？

「ふえっ／＼／」

かわいらしい女の子がいた。するとアレンがいきなり慌てだした。

アレン

「あつあなたはフリーディア第24王女様じゃないですか!?!なぜこんなところに」

真理名

「「「王女様?」」」

王女

「だつて学院に行きたくて」

と上目遣いでアレンを見る。アレンは困ってきたな

真

「あのさ名前教えてくんない。同じチームになるなら」

アレン

「ちよつと黒宮さん!?!?」

王女

「いいんですか!？」

真

「いいぜ」

アレン

「僕の話しを聞いてくださーい!ー!」

~~~~~回想終了~~~~~

で王女の名前はカエデ=フリーディアといって背が155センチと小さいが歳は18と俺の二歳上というのは驚いた。で

真

「であのケルベロスどうするの?」

アレン

「って倒すしかないでしょう。だいたい白宮さんが【一番強いやつと戦いたい】と言っちゃったんですし」

理名

「ゴメンね。」

と謝っているがすでに二丁デザートイーグルを構えて臨戦体制に入ってるし。

真

「仕方ないか。カエデ」

カエデ

「なっ／＼／＼なんですか?」

真

「使える魔法系統は？」

カエデ

「回復です。」

真

「そうか、じゃ出番があるまで待っててね」

と頭を撫でる。

ポン

カエデ

「／／／／／／」

顔が真っ赤になった

真

「どっした？」

理名

「ちょっと真君、くるよ」

と白宮から言われ振り向くとケルベロスが走ってきた。

急いで俺は刀を抜き、構えた。すると

理名

「『戒めの撃弾』」

と宣言し、ケルベロスに白宮は撃ちまくった。

するとケルベロスは苦しみながら、動きが止まった。それを見た、

俺とアレンは同時ににケルベロスに近づいた。けど今は20メートルを一秒で行ける速さになってるので先に俺がケルベロスの前に着き、ケルベロスの前足を横に尻ぎ払い、切り離れた。で体制を崩して前に倒れそうになった時にアレンが到着。そして、

アレン

「『ブレイクアーム』」

と宣言し、右腕を元の何倍の大きさにしアップパーカットでケルベロスの上に飛ばす。そしてケルベロスが落ちてくる時、俺は

真

「『月牙水衝』」

と宣言してケルベロスに向けて、一気に刀を振りぬく。すると刀から三日月の形状の水の刃が放たれ、ケルベロスを通つ二つにした。ぶつちやけブーチの技をパクったのだが別にいいかで試験が始まってここまでかかった時間、五分。

試験官

「こつ合格だ。速すぎる」

確かにすごいな。

試験官

「そしたら寮の鍵をやる」

と鍵を試験官が投げてきたので受け取ると307号室と書かれた札がついてた。というか、

04 初登校にて

アレン

「だからカエデ様、惚れたっなんですか。まだ出会って間もないですよー!」

カエデ

「ウォル君、恋には時間は関係ないよ。だいたいクロ君はあたしの身分なんて関係なく接してくれるし、ちよつと顔は女の子っぽいけどけっこうあたし好みのルックスだし」

アレン

「屁理屈です!」

理名

「あれれ〜アレン君、じゃなくてアレンちゃん。そんなに真君をカエデちゃんにとられるのいやなの〜」

アレン

「なっ／＼ちっ違いますよ。えつと／＼その／＼」

理名

「顔が真っ赤にして説得力ないよ〜」

アレン

「そっ／＼そしたら白宮さんはどうなんですか!」

理名

「私は銃があればいいの。だから恋愛なんて私にはいらない」

カエデ

「シロさんはこういう人って昨日わかりました。というかウォル君、あれですか。自分がクロ君と一緒に時間が長いから手を出さなっただけですか!？」

「でも、黒宮真です。試験から1日がたち、学院に登校してるんですが、

なんですかこの修羅場。

いや登校中に修羅場なんて珍しい……じゃなくてなんでこうなったんだ。昨日なにかあったのか!？」

~~~~回想~~~~

俺らは試験が終わったため寮の部屋に来ていた。というか

真

「広いな」

アレン

「はい、レナーナ学院の寮は広くて快適って有名なんですよ。リビングに寝室は二部屋、さらにキッチンを備わって、生徒ならタダ!」

真

「どこの不動産だ。待て寝室は二部屋って言ったよな?」

アレン

「はい。一部屋に二つベッドがありますから人数は足りですよ」

真

「俺以外女だけど」

シーン

アレン

「だっ／＼大丈夫です／＼」

真

「何が!？」

アレン

「僕／＼一緒の部屋でいいですよ／＼」

カエデ

「ダメです。クロ君はあたしと一緒の部屋です!！」

アレン

「カエデ様!？」

真

「つかカエデってそんな性格だったか!?!?!というか白宮は!?!」

アレン

「寝ましたよ」

真

「速え〜よ!！」

〜〜回想終了〜〜

で結局俺がリビングのソファで寝たんだ。って昨日から修羅場始まってんじゃん！！

としてるうちに教室に着いた。

席は適当に後ろに座ったのだが、右隣にアレン、左隣にカエデ、前に白宮。

なんだこれは。

つかアレン男にしか見えねえ

なんでかというと実はレナーナ学院の制服は男女共通で校章が入った紺色の上着に白のシャツ、そして茶色と白のチェック柄と黒のネクタイだからである。

着方は自由なので俺は上着のボタンは全て開け、シャツは出しているネクタイをちよつと緩んだように結んだスタイルだ。けどぶつちやけ俺以外は真面目に着ている。

〳〳数分後〳〳

そろそろ時間なので席についてるとドアが開いて、先生が入ってきた。タバコをくわえながら、つか銀髪である容姿は

先生

「今日からお前らの担任になるハヤト〳ヘルズだてめえら覚悟しとけ！！」

獄〇隼人だあああゝ！！

続く

## 05 決闘にて

ワァ〜キャ〜

真

「なんでこんな目に」

ど〜も〜黒宮真です。今、学院の敷地の中にある闘技場にいます。何故、こんなとこにいるかというときっかけはHRだった。

〜〜回想〜〜

ハヤト

「ではためえら自己紹介しろ」

朝、心の中で突っ込んで数分がたちHRになって自己紹介になつたらしい。ちなまにハヤト〃ヘルズ先生は年齢は25、魔法系統は爆発だという。容易に想像できた。でハヤト先生が爆発で魔物を吹っ飛ばす姿を想像してるうちに俺の番がきた。

真

「俺の名前は黒宮真、歳は16、魔法系統は」

？

「さてその服装はなんだ貴様はちゃんと服を着るの気はないのか！」

なんだいきなりセリフかぶせて。誰だろうと思って見るとそこにはいかにも自分が偉いと思つた若者がいた。まあ俺も若者だが

真

「あんた誰？」

？

「愚民が我を知らぬのか」

だって異世界がから来たんだし

？

「ふん我が名はテスラ＝リルト、リルト家の12代目当主だ」

真

「それで」

ザワザワ

んっなんで騒がしくなったんだ？

テスラ

「貴様、我がリルト家を侮辱する気か！？」

はあ！？待て

真

「どこにそんな要素があった。だいたいそんなに偉いのかあんたの家？」

テスラ

「許さん！！決闘だ」

真

「何故に!？」

ハヤト

「面白い。俺が審判してやる。野郎ども放課後に闘技場にこい!」

真

「なんで先生もノリノリなんですか!？」

〓〓回想終了〓〓

というわけで決闘をするのだが観客が多すぎ。というか。

テスラ

「ワハハハ我の土の魔法でひれ伏せさせるわ!」

なんだあれ。自信ありまくりかよ。決闘前にあいつらに応援メッセ  
ージをもらったのだが

白宮【いいな、私もやりたい】

白宮、応援じゃね、ただ銃使いたいから決闘したいだけだろ

カエデ【あたしのために決闘なんてありがとうございます。】

聞いた話しだとテスラは政略結婚のための婚約者候補で決闘で負け  
たら婚約者の資格が剥奪らしい。というか巻き込まれて強制的にな  
るんだが。どうゆう解釈をしたんだ朝のHRの時!？

アレン【黒宮さん。大丈夫です。修行通りにやれば勝てます】

おお〜まともな応援はアレンだけか。

ハヤト

「それでは決闘開始！！」

テスラ

「『ショットショット』」

と宣言して地面から膨大な量の土の弾丸が出てきて向かってきた。速攻かよっ！？　ちっ月牙シリーズじゃ捌ききれない！！

真

「『雷撃の射手』」

と俺は宣言し、自分の身長の数倍くらいの電撃でできた矢を何十本も形成し、土の弾丸に向けて放った。すると土の弾丸にあたり相殺どころか電撃の矢が土の弾丸を破壊、貫通し、地面にいくつものクレーターを作っていく。

テスラ

「なっ！？」

相手はそれに驚いている。俺はその隙に一気に近づき、刀を鞘から抜き、居合い斬りでテスラの両足を斬る。そして左足を軸にし、テスラの後ろにまわり、刀を振り下ろし、テスラの左腕を斬り離し、そして振り下ろした勢いを殺さず振り上げ、テスラの右腕を斬り落とした。

テスラ

「ゲアアア!!」

とテスラは叫び、倒れた。そしてテスラの両腕、両足があった場所からけっこうな量の血が吹き出した。

それを見て俺は持つてきていた。手入れ用の紙で刀についた血を拭い、鞘に収めた。そしてテスラに近づき、頭をわしづかみ、耳元で

真  
「テスラ!!リルト、地獄へ招待しよう」

とささやいた。すると

テスラ

「嫌だあああゝ!!」

と戦意が失った。というか精神破壊?

ハヤト

「終わりだ。というかヤバイなクレイヤ先生呼ぶか」

真

「クレイヤ先生?」

ハヤト

「保険室の先生だ。回復系統の魔法のエキスパートだ」

へえゝ

クレイヤ

「呼んだか?」

ハヤト

「相変わらずの地獄耳だな。まあとりあえずケガ人だ」

クレイヤ

「わかったよ」

なんだあれは、保険室の先生って白衣と思った。だけど白衣のかわりに黒衣、くわえタバコに右目に眼帯。どこの悪者だよ。

テスラ

「あああああ〜!!!」

クレイヤ

「うるせえ〜な」

と黒衣のポケットからだしたのは

真

「トンカチ?」

クレイヤ

「トンカチだが」

真

「振りかぶってなにすんですか!?!」

クレイヤ

「何って静かにするんだよ」

ドガッ!!

うわ〜トンカチで殴っちゃったよこの人。

結局テスラを治したクレイヤ先生だが先生曰く、精神は治らず、一生精神病院にいなきやいけならしい。後で聞いた話によるとテスラと同じチームの人は彼に仕えてた執事とメイドで、人使いが荒いテスラが精神病院行きになったのを手放して喜んだらしい。

続く

## 06 会話にて

?

「ホント真のおかげだぜ」

???

「ちよつと兄さん!？」

???

「真さんになんてことを」

アレン

「騒がしいですね」

カエデ

「なななクロ君との距離が〜!!」

理名

「いいんじゃない」

ど〜も〜黒宮真です。

決闘があつてから数日が経ち、実はルームメイドが増えました。

誰かというとテスラの元チームメイトに元執事とメイドの人たちです。

最初に俺を褒めたのはエドワール＝エリア、こいつは一番テスラのことは嫌いでいつも陰口を叩いていたらしい。

でなんで俺を褒めたかというと実はあの決闘、賭け事をかねていて、俺に98倍というあり得ない倍率でエドワール、略してエド（なんか突っ込みたい）は有り金全部俺に賭け、ボロ儲けしたらしい。

たしか一兆ルくらい。

ルクとはこちらの世界の通貨で1ルクは1円と同じみいだった。次にエドを兄さんと呼んだのはアルフォールⅡエリア、エドの双子の弟である。

背が高く、優しい青年だがドジっ子でよく転んでしまう。そして兄弟の見分け方は簡単でアルフォール略してアル（こっちも突っ込みたい）が身長198センチに対し、エドは157センチと小柄ということだ。二人とも双子というのでどっちも魔法系統は錬成だという。もう我慢できん。お前ら、鋼の錬○術師のキャラクターだろうがあゝ！！

ゴホン。でゝ最後に淡々とした口調で話したのはアイスⅡフロスト、彼女は人間じゃなく妖精らしい。なので魔力は普通の人間の20ゝ25倍あるらしい。というか、決闘が終わってからいつも俺の近くにいてる不思議な人である。

エド

「なあ真、お前、魔法何が使えんだ系統じゃなくて作ったやつ」

真

「あゝ実用化したのは月牙シリーズと射手シリーズで月牙シリーズは月牙水衝、月牙炎衝、月牙風衝、月牙雷衝、月牙岩衝で。射手シリーズは雷撃の射手、炎撃の射手、風撃の射手、水撃の射手、岩撃の射手だ」

エド

「へゝ」

アル

「月牙シリーズと射手シリーズはどう違うんですか？」

真

「それはな月牙シリーズは三日月の形状の刃飛ばすやつで単体用、水衝は防ぐと分裂して刃が増え、炎衝はかすつても火傷させれる、雷衝は絶縁体以外なら防御不可、風衝は元は風だから目に見えない。岩衝は防ぐと碎け、目眩ましになるという元素ごとに特性がある。

射手シリーズは自分の身長の数倍くらいの矢を何十本も形成し、相手に当てる複数用で特性は月牙シリーズと同じだ」

アイス  
「なるほど」

相変わらず淡々と喋るなあ〜アイスは。

エド

「後、あの噂知ってるか？」

真

「噂？」

アレン

「内臓強奪事件ですね」

なんだそのグロい事件は

真

「なにそれ？」

アイス

「ここ最近、真夜中に外に散歩にいつてる女子生徒が何者かが襲われ、その女子の生徒の内臓を半分ぐらい奪って去っていくというものです。」

怖え〜よ！！つか

真

「それ殺人事件だ！！」

アル

「みなさんクレイヤ先生の魔法で助かりましたよ。さすがに内臓を回復させるから副作用で一週間眠っている状態ですけど」

と不安そうなアル。つか内臓も治してしまうクレイヤ先生。ぶっちやけ想像つかんというか

真

「みなさん？」

アイス

「昨日までに被害者は30人近くになります。」

アイスよ、無表情で淡々と喋らないでちと怖い。

理名

「よし犯人を捕まえよう！！」

と銃を拭きながらいう白宮。って

真 アレン カエデ アル

「「「捕まえるうううう〜！？」」「」「」

続く

## 07 捜査にて

真

「なんでこつなる」

どつも黒宮真です。白宮の突発的な提案で、散歩してんだが、

真

「なんでお前らパジャマなんだよ!？」

そう、俺が制服というのに白宮とアイスはパジャマ姿である。しかし白宮はパジャマの上にホルスターを付け、デザートイーグル2丁、トカレフ1丁、背中にマシンガンを装備という異様な姿だが、

理名

「アイスちゃんがパジャマでって」

真

「何故に？」

アイス

「これまでの事件の被害者は全員パジャマだから」

それでもなあ〜

アイス

「後、これノノ/かわいい？」

と恥ずかしいそうにしながら頬を赤らめて聞いてくる。 なんと

うか、クマさんがプリントしてあるパジャマ、いつもと違う言動。

真

「ちょっと／＼／＼かわいい」

アイス

「ありがとう／＼／」

理名

「おじゃまかな？良かったねアレンちゃんとカエデちゃんが居なくて」

真

「そついやなんで二人はいないんだ？」

理名

「カエデちゃんは一応一国のお姫様だから、けど【クロ君と離れたくない】とだだをこねたからアレンが取り押さえ。まあエリア兄弟を応援として送った」

だからこのメンバーか

真

「でどうやって捜査するんだ本職」

理名

「もちろん圏捜査よ」

アイス

「このやり方が手っ取り早い」

真

「確かに」

理名

「でもね、真君。真君にもパジャマ着てもらいたかったんだよね、でも刀があるから残念」

とどこから出したのかわからないが白宮の手にイチゴ柄のパジャマがあった。

真

「待て！？俺、髪が肩ぐらいあって後ろに紐に結んでいるだけの男子だ」

アイス

「かわいいと思う」

真

「アイス！？」

意外な賛成者！？

理名

「だって顔、そこら辺の女子よりかわいいよ」

嬉しくねえよ

と世間話や白宮の銃の自慢話（これが長かったような）をして数分が経ち、街灯が並んだ通りに来た。

アイス

「9時になった」

それが？と俺が思ったその時、

ペアア

あたり一面強い青い光に照らされた。

真

「綺麗……」

アイス

「今年は青い月が夜9時になると魔力の光を発し、夜を明るくしてくれませす」

すぐさすがは異世界とっていると

？

「あなたの内臓はどんな味、焼いたらおいしい？煮たらおいしい？」

と変な歌を歌う仮面の女と影のない黒いバケモノ達があやってきた。

続く

## 08 仮面の女との戦いにて

仮面の女

「フフフフ」

どうも黒宮真です。今、目の前にめちゃくちゃ怪しい仮面の女がいます。ぶっちゃけコイツだろ内臓強奪事件の犯人。だつてさつきまで【あなたの内臓はどんな味？焼いたらおいしい？煮たらおいしい？】って歌つてたし。

真

「つか黒いバケモノ何？」

中身がない鎧の形、いかにも悪魔つて形のやつとかバリエーションが色々あるんだが

アレン

「あれは影。仮面の女の魔法系統はたぶん影系」

なるほど。

仮面の女

「行つて」

と仮面の女がいうと黒いバケモノ達が襲いかかってきた。

真

「ちっ」

急いで鞘から刀を抜こうとしたら、

ガガガガガ

もの凄い轟音が鳴り響いてバケモノ達が凄い勢いで破壊されていく。  
もしかしてと後ろを向くと

理名

「キヤハ やっぱH&K社製MP5シリーズは最高だよ」

目がこれまでなかったかというぐらい輝いてマシンガンの引き金を  
引く白宮がいた。だが

仮面の女

「『シャドウドール』」

と宣言し、街灯や木々の影から黒いバケモノを作っていく。

真

「くっ」

アイス

「真さん、仮面の女を倒してください。わたしと理名さんで影達を  
駆逐します。」

真

「しかし!？」

アイス

「確かに理名さんだけでも大丈夫そうですね」

真

「えっあゝ確かに」

あれは誰も止めらせねえわ

理名

「キャハハハ」

とにかく俺は居合い抜きの要領で振り抜き、

真

「『月牙雷衝』」

と仮面の女に放つが

仮面の女

「『シャドウウォール』」

と宣言し、仮面の女の影から黒い壁が出てきて、月牙雷衝を防いでしまった。

真

「なっ影って絶縁体かよ！？ならこれならどつだ！！」『岩撃の射手』

「

と岩撃の射手を放つが、

仮面の女

「『シャドウイーター』」

と宣言し仮面の女の影から黒い口が出てきて岩撃の射手を飲み込んでしまった。

真

「ちっ」

ならこれとは一気に近づき、刀を振り下ろすが

仮面の女

「『シャドウネイル』」

と宣言し、自分の影を腕にまとわせ、悪魔のような爪をもつ腕に変え、刀を受け止めた。

ガキン！！

真

「ぐっ」

仮面の女

「隙あり。『シャドウポール』」

と宣言して

真

「がはっ！！」

黒い柱が仮面の女の影から出てきて、俺のみぞおちにぶつけやがった。一応刀で防いたがヒビが入ってふつとんだ。俺も刀と違う方向にふつとばされたが、すぐに体制をなおすが目の前に仮面の女がいて

仮面の女

「おしまい」

俺の体を右腕で貫いた。

続く

09 仮面の女との戦い2にて

仮面の女

「フッフ」

どうも〜黒宮真です。って呑気にやってる場合じゃねえ!?

今、大ピンチです!! 仮面の女の腕が俺の体を貫いてます!!

真

「ゴポツ」

ピチャツ

血?吐血してるよ俺。ぶっちゃけ息がしにくっ!! たぶん肺がひとつ潰れた。なんとかしねえと

仮面の女

「あがいても無駄よ。武器がないあなたができることはないわよ。諦めてあなたの内臓食べさせて」

武器? あっ!!

真

「武器が刀だけだと思っなよ!!」

と俺は上着の裏に仕込んでたナタを取出し、俺の体を貫いてる仮面の女の右腕を斬り落とした。



仮面の女

「クソオオオ！！ダセ、ダセ、ダセ、ダセ、ダセエエエエ！！」

「しゃああこれぞ我〇の砂漠〇と植木〇助のガ〇バーの合わせ技、砂漠箱！！これなら影魔法が使えない。」

「一か八か即興で魔法作ってぶつけてやる！！イメージするのは龍。地獄の業火より生まれたし龍。それを斬撃としと放つ。」

真

「くらいやがれ！！『業火龍破斬撃』」

と宣言し、ナタを振りかぶり、ナタから炎を龍を放つ。

そして

ドッカッン！！

砂漠箱に当たり、大爆発を起こし土煙が起きた。

土煙が晴れるとそこには、左腕と両足が灰となって散っていく黒焦げの仮面の女が倒れていく姿があった。

真

「やった！！」

と思った瞬間目の前が真っ暗になった。

続く

10 保健室にて

目を開けると白い天井が見えた

どうも、黒宮真です。今さっき目が覚めたのだが

真

「どこだよ？」

クレイヤ

「保健室だよ」

真

「わっ！！クレイヤ先生！？」

クレイヤ

「保健室に保健室の先生が居て当たり前だろうが」

真

「すみません」

そして周りを見てみるとルームメイトとの女子達が出た。

アレン

「大丈夫ですか黒宮さん！！」

真

「大丈夫だよ。叫ばなくても」

アレン

「あっ／＼／つい」

心配かけたみたいだなアレンには。

カエデ

「ぐすっ／＼／良かった（涙）」

ってカエデ大泣き始めた!?

真

「泣くなよ!!」

とカエデの頭を撫でると

ポツン

カエデ

「／／／」

泣き止んで顔が真っ赤になった。

前にもあったような？

理名

「ふう〜」

なんだ白亭、その反応は

クレイヤ

「何、ため息してるの白宮理名？今回の治療の時、魔法で一時的に出血を止めてくれたじゃない。あれがなかったらあれ、黒宮真から抜けなかったんだから」

理名

「なっ／＼／言っな！！」

へっ

真

「白宮、ありがとな」

理名

「ふん／＼／今度の休み、銃ひとつぐらい買ってくれ」

真

「はいはい」

まったく白宮らしいよ。

アイス

「……よかった」

と類に一筋の涙を伝わらせるアイス。      アイス？

アイスが泣いてる！？

真

「ちょっとアイス！？泣かないで！！」

いつも無表情だからなんか慌てるのだが。

アイス

「うん……」

なんとかアイス泣き止んでくれたがまだ泣き目だ。アイスらしくないのだが

クレイヤ

「ふふっ」

真

「クレイヤ先生……!」

クレイヤ

「ああすまない。」

真

「で俺、クレイヤ先生の魔法で傷治してもらったんですよ肺ごと」

クレイヤ

「ええそうよ」

真

「そしたら副作用で俺、一週間寝てたんすか？」

クレイヤ

「それがね。あれから3日しか経ってないのよ不思議と。もし良かったら今度話しても」

真

「遠慮します!?!」

ぜってークレイヤ先生俺の体使って実験する気がする

そういえば

真

「今回の犯人どうなったんですか?」

死んでたらいやだな。

クレイヤ

「それはね」

バン!!

そこに勢いよく保健室のドアが開かれ、そこには小学生ぐらいな女の子がいて、

?

「お父さーん!?!」

と俺に抱きついてきた。  
って

真 理名 アレン カエデ アレン 「「「「お父さん!?!」」」」

「「

続く

11 お父さん騒動にて

女の子

「えへへへ」

ど〜も〜黒宮真です。今保健室で小学生ぐらいな女の子の頭を撫でてます。

真

「とっとうか誰なのこの子？」

女の子

「だ〜か〜らお父さんの子どもだよ」

いやいや俺、17歳だよ。子どもいるわけないし、だいたい異世界から来てるし

クレイヤ

「あ〜早かったわね」

女の子

「うん。クレイヤおねいちゃん」

真

「クレイヤ先生、何か知っていますのですか？」

クレイヤ

「その子。今回の事件の犯人」

真

「はっ？」

クレイヤ

「白宮理名から聞いたけど異世界の住人だよね」

真

「はい。けどそれが？」

クレイヤ

「そしたら知らないはずだね。実はこの世界には『人生やり直しの刑』があるの」

真

「人生やり直しの刑？」

クレイヤ

「そつ。まずは精神操作系の魔法で犯人の記憶を一般常識と勉強以外のものを全部消すの」

コー○ギアス？

クレイヤ

「で錬成系の魔法で体を6歳の体にして終わりよ」

人○錬成！？

真

「大丈夫何ですか。それ！？」

クレイヤ

「ちなみに6歳の体にする際、黒宮真の姿をベースにしました」

と俺が写ってる写真を見せるクレイヤ先生。

写真？

真

「いつ撮ったんだよ!？」

クレイヤ

「いいじゃない。それよりどう似てる?」

そういわれて俺は女の子を見る。

確かにこの世界にはないはずの黒髪黒目、ぶっちゃけいままで俺しかいない。顔をよく見たら、なんとなく俺に似てる。

真

「まあ似てます。」

クレイヤ

「やっぱりそれが原因なのかしら」

と首をかしげるクレイヤ先生

真

「原因って?」

クレイヤ

「実はね普通は6歳になってから記憶がないので孤児院に入れるの」

で?

クレイヤ

「この子ね、6歳になってから【お父さんどこおる?】って聞いてきたらしいの」

と写真を再び見せるクレイヤ先生。

っでもしかして

真

「その写真を見せたらビンゴと?」

クレイヤ

「そついう事」

やっぱりな

クレイヤ

「後、まだ名前ないからつけてね」

いきなり〜!?!?

女の子

「お父さん。お名前つけてええ〜」

と上目遣いで頼む女の子もとい娘（結局認める）

真

「しょうがない。クレイヤ先生」

クレイヤ

「なんだ？」

真

「この子の魔法系統ってまだ影ですか？」

クレイヤ

「そうだけど」

真

「じゃあひねりがないけど今日からキミの名前は影美ね」

影美

「わかった。今日から影美の名前は影美だね」

あゝ自分のこと名前でいうとか慣れねえと

真

「そしたら影美は俺が男手ひとつで育てあげないといけないとか」

クレイヤ

「いやね。実はお父さん。つまり黒宮真よりは積極的じゃなかったけど【お母さんもいる】って言ってたらしいわ  
へ〜

真

「誰なの？」

クレイヤ

「それがまだわからないの」

ヤバイなあゝお母さんいたのかよと思っていると急に影美がキョロキョロし始めた。

真

「どおした影美？」

影美

「あっお母さんみつけ」

お母さん見つかるの速っ!?

とにかく影美は見つかったのが嬉しく、飛びついた。アイスに。

アイス？

アイス!?

アイス

「……えっわたし？」

影美

「うん」

とここまで影美が俺に抱きついてから固まったルームメイトの女子達がうごきだして（俺は固まってなかったけど）一緒に

真理名 アレン カエデ

「「「アイスがお母さん!?!?!?!」」」

と叫んだ。

続  
く

## 12 お父さん騒動2にて

ハヤト

「よし転入生自己紹介しような」

どくもく黒宮真です。保健室での出来事から1日が経って久しぶりに学院に登校してきたが

影美

「黒宮影美です。6歳で魔法の系統は影です。」

なんで影美が転入生としてこのクラスにくるんだ。お父さん聞いてないぞ？

ハヤト

「そしたら席は真の隣でいいかな？」

つて意外な事実発覚！？ハヤト先生って子ども好きなの！？

そして今、席が当初と変わっておるのに気づいた。

俺の席は変わらず、左隣が理名、前がアレン、右隣が空席で、そしてその空席の隣がアイス。そして空席に影美が座ることになる。これ何かの陰謀？

影美

「あつ！お父さんとお母さんの隣だあ」

と影美が言ったとたん

バツ！！

クラスのみんな全員振り返ってきた。

ええ怖ええよみんな。

で時間が進み4時間目の魔法理論学の時間。

先生

「ではこの錬成系統の魔法についての発動理論を誰か書いてください。」

うう俺、元素系統の魔法だからあんまりわからん。まあエリア兄弟が錬成系統だし大丈夫だろ。

影美

「は〜い」

そうそう。って影美！？

で黒板に向かう影美を心配するんだが

パシャパシャ

真

「誰だよ影美を写真撮ったやつ！？」

？

「あたしだよ〜」

と顔を向けたのは確か放送部の

朝倉

「放送部期待のエース、朝倉和子よ」

え〜と突っ込んでいいか。見た目は八〇七の憂鬱の朝倉で中身というか立場がネ〇まの朝倉って

朝倉

「それより影美ちゃん助けたら？」

と言われ、黒板を見ると、

影美

「んしょ。とどかない」

チヨークを持って一生懸命手を伸ばす影美が見えた。  
あゝ影美身長130センチぐらいだから。危なっかしいなあ。

真

「先生ちよつといいですか？」

先生

「なるほど。よからう」

先生の了解を得て、黒板の所に行く。

影美

「どっしたのお父さん？」

真

「ほら、届いてないから」

と影美を持ち上げる。

影美

「ありがとう」

真

「そしたら早く答え書こうな」

影美

「うん」

と影美はスラスラと答えを書いていく。へっ？スラスラ？

そして

影美

「できた」

と終わって二人とも席に戻って改めて影美が書いた答えを見ると、

………影美どこでこんなの覚えた？

そこには

先生

「完璧だ。これは学会でも出せるレベルの錬成系統の魔法の発動理論だ」

先生が褒めちぎるほどの魔法理論がびっしり書かれてた。

影美

「お父さんほめて〜」

と影美が言ってきたので

真

「よしい子いい子」

と頭を撫でてやる。

影美

「えへへ〜」

〜数分後〜

で昼休みになって、

クラス女子1

「ねえ影美ちゃんかわいいよね〜ほんとに黒宮君の子ども? いいなあ〜」

クラス女子2

「大丈夫? 影美ちゃんのお世話は?」

朝倉

「ねえねえ誰との子ども? アレンちゃん? 理名ちゃん? それともお姫様?」

真

「ちよつと。って朝倉!」

もうなんだんだよ  
〜その夜〜

さて、寝る時間となったのだが部屋割りがなにこれ

ベランダ（ハンモック）

エド・アル

リビング（ソファ）

白宮

寝室1

アレン・カエデ

寝室2

俺・アイス・影美

待て待て。なんだこの展開は？なんでも影美が家族三人で一緒に寝  
たいって言ってたからだとエドから聞いたが

真

「さすがにこれは」

アイス

「あの／＼その／＼恥ずかしい」

影美

「おやすみなさ〜い」

その家族三人でひとつのベッドはないだろおお！！

続く

### 13 ある日の授業にて

ハヤト

「よし。今日は1日魔闘学の時間に当ててもらった。」

どうも黒宮真です。影美が転入してきて数日が経って、今日、学院の裏山に着ています。

ハヤト

「今回の授業ではとにかく裏山にいる魔物をやっつけてこい!!そのため『クラスカード』を配る」  
クラスカード?

でカードが配られてたのだが

真

「なにこれ？」

カードの色は黒く、そこに白で『classso』と書かれてた。

ハヤト

「では『クラスカード』について説明する。コイツは学院に入ってから何日か経ってから配布されるものでコイツを持って魔物を倒すとコイツに魔物の強さが関係するがバトルポイント略してBPだがそれと電子ルークが貯まる。そして一定量BPが貯まるとクラスが上がる。クラスには上限がないぞ。ちなみに俺は『class546』だ」

うわっゲームかよ!?!けど最近、金ってどうやって集めようと不安になってたところだ。いつまでもエドに食料買ってもらうわけには

いけないし。

ハヤト

「では野郎ども行ってこい!!」

おお!!

みんなヤル気あるなあ

理名

「真君。チームみんなでいく?」

真

「いや二人一組で行こう」

アレン

「どうしてですか?」

真

「いや8人は多過ぎだ。それに別れたほうがそれぞれ動きやすいだろ」

アル

「確かに」

エド

「そしたら、黒宮の旦那。俺はアルと行くぜ」

アル

「うん、兄さん」

とさっそく裏山に向かうエリア兄弟。

真

「ちなみに俺は影美と行くぞ」

影美

「やったあ」

アレン

「そしたら僕は」

カエデ

「アレン行くわよ」

アレン

「ちよつとカエデ様!？」

とカエデに引っ張られ、裏山に行くアレン。

理名

「じゃ残り物どおし頑張りましょ」

アイス

「はい」

理名

「相変わらず無表情だねアイスちゃんは」

と銃を磨きながらの白宮となんか名残惜しいようなアイスが裏山に行った。

影美

「お母さん行ってらっしゃい!」

で影美が声かけると

アイス

「ケガに気を付けて」

とアイスを微笑んで返事してくれた。

最近アイス、表情豊かになってきたな

真

「さて行こっか」

影美

「うん」

そして俺と影美が裏山に向かった。

続く

14 ある日の授業 2 S i b e H ドド

アル

「兄さんびっつ？」

よっ！！エドだ。俺は黒宮の旦那と離れてアルと裏山にきたが

エド

「でんでみつかんねえ」

そうまったくみつかんないのだ。

アル

「そんな簡単にみつかんないよ」

エド

「しかしなあ」

アル

「ちょうどいい機会だし聞きたいことがあるとけど？」

エド

「なんだアル？」

アル

「最近、毎晩何をしてんの？錬成魔法使って」

ギクッ！！

エド

「なんのことかな？」

アル

「ごまかしきれないよ兄さん」

エド

「じゃあ誰にも言つなよ」

アル

「分かったよ」

エド

「銃を作っていた。」

アル

「なんで？」

エド

「白宮のアネゴに／＼贈り物」

アル

「へえ、女っ気がなかった兄さんが」

エド

「うるせー!!」

俺だつて／＼恋するわ

エド

エド

「ん？」

音が聞こえたほうを見ると

アル

「骸骨がいつぱいいる」

エド

「確か名前はボーンズだったか、ざっと見100体か。アル。この裏山って金属鉱物の粒子が多く含んでいたよな？」

アル

「うん」

エド

「じゃあいくぞアル！！」

アル

「オツケー兄さん！！」

エド アル

「『『ウエツポンメーカー』』」

と宣言し、俺はランス、アルは身の丈の倍ぐらいの斧を作り出した。

エド

「おらおらおらおら〜！！」

と俺はボーンズを貫いたり、切り裂いたりし

アル

「はっ！！やっ！！」

アルは斧でぶった切ったり叩き潰したりしていた。

〽〽数分後〽〽

エド

「ふ〜」

アル

「終わったね」

そこにはボーンズの残骸が山のように重なっていた。  
グキヤアア〜

といきなりうなり声が聞こえ、クモのような8本足がある骸骨が現れた。

エド

「スパイディックボーンズ。親玉登場ってか」

アル

「いつものいく？」

エド

「おつよ『ストーンボックス』」

と宣言し地面から岩の壁がでてきてスパイディックボーンズを囲み、閉じ込めた。

アル

「いくよ『アイアンニードルタワー』」

ストーンボックスごとスパイデックボーンズを鉄の針の塔が貫いた

エド

「これにて終了」

アル

「やったね」

続く

現在

エドワール＝エリア

class34

所持金（今までの足して）107億2475ルク

アルフォール＝エリア

class34

所持金

75万ルク

15 ある日の授業 2 S i b e アレンにて

カエデ

「さっさとついてきなさい!！」

どうもアレン!! ウォルカです。授業で魔物退治で裏山に着いています。そして

アレン

「ちよつとカエデ様、引つ張らないでください!！」

カエデ様にもものすごい速さで引つ張られています。最初の頃の気弱な性格はどこに行ったのでしょうか?

カエデ

「ここら辺でいいかな」

アレン

「何がですかカエデ様?」

カエデ「あたしと手を組まない?」

アレン

「何のことですか?」

まったくもって意味が分からないのですが?

カエデ

「クロ君のこと。最近、影美ちゃんのおかげでフロス君がクロ君にベタベタし過ぎでしょ。だから恋敵をクロ君から離すため協力しよ

うとうわは「

ほえ／／／

アレン

「ぼつ僕／／くつ黒宮さんのこと／／すっ好きじゃないし／／」

カエデ

「あたしそんなこと言ってないけど。」

アレン

「うわっ／／／」

カエデ

「とりあえずウォル君がクロ君のことが好きって再確認できたし、改めて手を組まない？」

アレン

「むう〜手を組みますよ」

カエデ様の／／イジワル

ガサガサ

カエデ

「なんか聞こえる」

アレン

「来ます!!!」

ぷによぷによぷによぷによ

カエデ

「なにあの青いゼリー状の魔物は？」

アレン

「スラムです。一気に片付けます。『ウルティックススタイル』」

と宣言して爪を伸ばし強度をダイヤモンドの10倍ぐらいにする。さらに身体能力を上げる、便利な魔法だがデメリットとして、狼の耳と尻尾が出てくるのが嫌なんだけど。それより

アレン

「行きます！！」

と僕は言い放って、スラムの群れに向かい、目にも止まらない速さでどんどんスラム達を切り裂いていく。

〜数分後〜

今、切り裂いて524体目でようやくスラム達を全滅させた。

アレン

「終わりました」

と言いつルティックススタイルを解除する。

カエデ

「お疲れ。言い忘れたんだけどクラスカードで回復系統と呪式系統の魔法を使う人の物は近くに居る別の系統の人のBPをコピーしつ貰えるんだって」

アレン

「そうだったんですか」

よかった。カエデ様が戦なくて

カエデ

「つて上を見なさい!？」

はい? とりあえず上を見ると

スラムの数倍大きい赤いゼリー状の魔物が隕石の如く落ちてきていた。

アレン

「なっ!? マルクススラム!! あゝもう間に合え『バーストアーム』」

┌

と宣言し左腕を砲身に変え魔力をそこに貯める。

そして

アレン

「くらえ〜!!」

ありつたけの魔力を固めた砲弾をマルクススラムにぶつけた。

ドッカーン!!

凄まじい爆発によりどうにかマルクススラムは倒した  
アレン

「よかつた」

と僕は情けなく地面座ってしまった。

カエデ

「だらしないわね」

アレン

「僕、女の子だからいいでしょ」

カエデ

「とりあえずクロ君とフロス君を引き離す計画をたてましょ」

アレン

「少し休ませてくださ〜い」

続く

現在

アレン⇨ウォルカ

class44

所持金94万ルク

カエデ⇨フリーディア

class44

所持金94万ルク

## 16 ある日の授業 2 Side 理名にて

アイス

「魔物確認。クワツパと言われるカエル型のもの」

「やつほ、白宮理名だよ。裏山に魔物退治に着ていて、さっそく魔物と遭遇うう」

理名

「腕が鳴るよ、『戒めの撃弾』」

と2丁のデザートイーグルから戒めの撃弾をクワツパ達に撃って、動きを止めていく。やつぱり銃を撃つってサイコロ

アイス

「わたしの出番……『アイシクルクロウ』」

と宣言しアイスちゃんの指の付け根から指を覆いながら両手合わせで10本のどでかい氷の爪が出てきた。そしてどんどんその氷の爪でクワツパ達を切り裂いていく。けどそうなるよ

理名

「暇だなあ」

私の出番がなくなるのだ。新しい魔法試してみようかな

理名

「『神速の撃弾』」

と宣言し、引き金を引いたと同時に約240メートル先のクワツパ

が額を貫かれ倒れた。

結構速いなこれ。

〓数分後〓

クワツパ達の残骸しかなかったので、少し休憩に入った。けど

理名

「なんか話すことない？」

アイス

「ない。それより銃の自慢話をやめて欲しい」

理名

「それはアイスちゃんがなんにも喋らないからでしょ」

アイスちゃんがまったく喋ってくれないのだ。相変わらずの無表情で

理名

「なんでいつも無表情かな？」

アイス

「別に」

理名

「真君と喋る時は表情が結構あるのにな」

アイス

「え？」

おっ！？なんかいい反応。ちょっとからかおうかな

理名

「じゃ今から言うこと想像して」

アイス

「わかった」

理名

「ある日の帰り道、真君がやって来ます。そして【休みの日どころか行かない？】とデートのお誘いをしてきます」

アイス

「へっ／／いやっ／／その／／／」

うわゝ顔真っ赤。珍しっ！！なんか楽しい

理名

「じゃあ今度はいつものように家族三人でひとつのベッドで寝ていきます」

アイス

「／／／！？何故それを知っている！？」

ふっふっふ元刑事の情報収集能力を舐めないでもらいたい。

理名

「そんなことより、で家族三人で寝ていると影美ちゃんがトイレに起きて行きました。そしてアイスちゃんがふいに起きます。目の前には真君の顔があり、その距離わずか数センチ、真君の息遣いか聞こえます」

と言った瞬間、

アイス

「ん〜!!!／／／／」

と両手を頬に添えて悶え始めた。こんな姿初めてみたよ。  
理名

「おいアイスちゃん」

アイス

「にゃあああ〜!!!／／／」

で結局何回呼びかけてもアイスちゃんは悶え続けた。  
この子大丈夫かな？

続く

現在

白宮理名

class67

所持金107万ルク

アイスⅡフロスト

class66

所持金106万ルク

17 ある日の授業 2 Side 真にて

影美

「ある〜日森のな〜か熊さ〜んに出会〜った」

ど〜も〜黒宮真です。魔闘学の授業で裏山に魔物を倒しにきています。ぶっっちゃけ魔物にまだ遭遇してないので、影美が森の熊さんを歌っています。さてそろそろ出てくると思うのだが

ドドドド

クラス男子1

「逃げる〜!!」

クラス男子2

「あれ絶対むりだから!!」

とクラスの男子二人が俺らに気付かず、走り去って行った。

真

「なんだっ たんだ?」

と前を見ると、

グキヤアア!!

熊さんがいました(最初に俺と白宮に襲った三つ目)

真

「確かアレンから聞いたけど名前、ベアールだったな」

影美

「わぁ 本当に熊さんが出た。」

影美、嬉しそうにしないの。ぶっちゃけ何体いるか分からんのだが、見てもベアールだらけで千体は軽く越えてるだろ！！ええ〜い新技食らわせてやる。

と上着の裏からナタ二本取出し、構える。悲しいことに刀にヒビが入ったからである。

真

「行くぜ『業火龍破斬撃』」

とナタから炎の龍の斬撃を放つ。あれから特訓して即興で作ってだした時より大きさが数十倍に膨れてあがってるのでベアールを一気に数十体飲み込み、灰と化した。しかしまだまだベアールがいっぱいである。

真

「次！！『水蛇豪流列破』」

と宣言し、頭上に水が集まり、ものすごい勢いで大蛇の形を模した水流でベアールをまた数十体飲み込み、潰したがやっぱりまだいる。

真

「何体居やがんだよ！！『雷虎砲撃斬射』」

と宣言しナタから虎の形を模した雷撃の斬撃を放つ。今度はベア―

ルがそれにより、感電したり、斬り刻まれた。けどまだいっぱいいる。

真

「あゝもう!! 『風鳥斬華』」

と宣言し、風の刃をかき集め鳥の形にし、放つ。

そしてベアール達が斬られ、肉の塊になるがまだまだいっぱいである。

真

「しつこい!! 『土槍連突破』」

と宣言し地面から何百本の土の槍を生み出し、ベアール達を突きまくる。けどやっぱりまだいっぱいいる。

真

「あゝ何体倒しやゝいいんだよ」

〜〜数時間〜〜

まだまだ俺はベアールを倒していた。

真

「どっから湧いて出てくる!?!」

いい加減ウンザリしてきた。

影美

「お父さゝんちょっと来て〜」

真

「なんだ影美？」

影美に呼ばれ、影美の近くに行く。

影美

「影美も魔法使つの『影パツクン』」

と宣言して、木々の影がベアール達の上に集まり、口のついた学院と同じぐらいの大きさの黒い球体が出てきて、

パクッ

土地ごとベアール達を食べてしまった。しかもそれでベアール全滅。

真

「はぁ!?!」

そりゃびつくりだろ普通。さて出した本人はと言つと

影美

「お父さんほめて〜」

とほめてコール。

真

「まっいつか。よしよしい子いい子」

と頭を撫でてあげる。

影美

「えへへ」

将来どうなるのかなと不安に思う俺だった。

続く

現在

黒宮真

class245

所持金156万ルク

黒宮影美

class256

所持金176万ルク

18 風邪にて

真

「はあ」

どくもく黒宮真です。1日魔闘学の日から1日経ち、久しぶりの休日ですが

アイス

「真さん。大丈夫？」

真

「あゝ頭がクラクラしてるし、体がダルい」

なんともまあ風邪をひいてしまった。で今、アイスに看病をしてもらっています。

真

「アイス、ごめんな。せつかくの休みに」

アイス

「いいの／＼わたし達、ふっ／＼夫婦みたいなやつでしょ」

アイス？なんで頬が赤いの？つか言葉がつかえつつかえだし。まっいつか

アイス

「あゝ真さん」

真

「なんだ？」

アイス

「今、二人つきりですよね？」

真

「そうだが」

アイス

「そしたら／＼キツキツ／＼キツ」

き？

Bannon！！

アレン

「黒宮さん、大丈夫ですか！？」

なんとまあ微妙なタイミングでアレンが部屋に入ってきた。

真 アイス アレン

「「「……………」」」」

無言つらっ！…！どうすんのこの空気。一応、俺がなんとかしてみよう。

真

「なあアイス。さっき何を言おうとしてたんだ？」

アイス

「へっ／＼／＼いやっ／＼／＼何にもないです!!」

と叫んで、アイスは部屋から出てってしまった。

どうしたんだアイス？

アレン

「あっ!!それよりお粥作りました。食べてください」

そっぴやお腹すいたな。とりあえずアレンが作ったお粥をみると

真

「アレン、お粥だよな？」

アレン

「はい!!」

真

「お粥がビーフシチューのような色してるのは何故だ？」

アレン

「それは隠し味に板チョコ20枚入れたからです。」

隠してねえよ!!

真

「で梅干しの代わりに何を乗せてるの？」

アレン

「ソーダ味の飴玉です」

ちよつと待て!!

真

「俺、そんな甘いお粥食べねえよ!!」

つか普通に食えるか

アレン

「でも僕、いつも風邪ひいた時、これ食べてますよ」

いたよ!!つかアレン甘党だったの!?しかもヤバイレベルで

真

「とりあえずそのお粥は俺、食べれないから」

アレン

「おいしいのですが」

と呟き、アレンは部屋を出ていった。そして入れ代わりにエドが部屋に入ってきた。

エド

「よつ黒宮の旦那、調子はどうだ」

真

「頭クラクラ、体ダルいだ」

エド

「そっか」

真

「それより刀直るのか？」

実は昨日の夜、エドに錬成系統の魔法なら刀直せると思い、頼んでいた。

エド

「あの後調べてみたんだがどうも錬成系統の魔法は一から物質を作らないといけないらしく無理だった。」

真

「そうか」

残念だな〜直せると思ってたのに

エド

「けど回復系統のやつなら直せるぞ」

真

「マジか!？」

エド

「おう!! 姫さんに頼めば大丈夫だ」

真

「わかった。すまないがさっそくカエデに頼んでくれないか？」

エド

「任せろ!!!」

と勢いよくエドは部屋を飛び出した。

くく数分後くく

お腹減ったなあく

Bannon

理名

「真君、お粥作ってきたよく」

今度は白宮か。

理名

「一応この前と合わせて銃二つ買ってよね」

それが目当てか!?

とにかく白宮のお粥を見ると、

なんだこりゃ!?!まだグツグツなってるのは分かるが

真

「なんでお粥が真つ赤なんだ?」

理名

「私が風邪ひいた時、食べてたスペシャルお粥 味付けに七味唐辛子ビン10本に一味唐辛子ビン10本にタバスコ20本にハバネロのみじん切りにしたやつ5個分で梅干しの代わりに青唐辛子。おいしいよ」

真

「そんな辛いもん食えるかあく!!」

白宮はヤバイレベルの辛党か!?

理名

「まったくおいしいのに」

とぼやきながら白宮は出ていった。そして入れ代わりに影美が入ってきた。

影美

「お父さん。お粥作ったよ」

真

「おっどれどれ?」

と内心ヒヤヒヤしながら影美の作ったお粥を見る。  
……………どうやら普通の梅干しが乗ったお粥である。

真

「じゃいただきます」

とレンゲですくって食べてみる

影美

「どじつ?」

真

「おいしいよ!…!影美は将来いいお嫁さんになるよ」  
となでてやる。

影美

「えへへ」

6歳でこんなにおいしいお粥ができるとはと不思議に思い、後、今後一切、白宮とアレンには料理をさせないと心に決意した俺だった

続く

19 文化祭話し合いにて

ハヤト

「おいお前ら、いづことがある。」

どくもく黒宮真です。風邪が治り、数日が経ち、いつの間に6月になった。どうやらこっちの世界には梅雨がなく、夏突入である。で上着とシャツが半袖になったところでハヤト先生がいきなり授業をHRに変えたのである。

ハヤト

「実は言い忘れてたんがなもうすぐ文化祭がある」

早っ！？普通秋じゃね？

ハヤト

「とにかく文化祭の出し物を考えて挙手しろ」  
なんとムチャクチャな。ほらみんなとまどつとる。

〳〳数分後〳〳

クラス男子1

「はい」

と一人の男子が挙手した。

ハヤト

「おっ」

クラス男子1

「写真屋」

ハヤト

「却下だ！！『ホワイティックバン』」

と宣言し、ハヤト先生は意見した男子にチヨークを投げた。そしてチヨークが男子の額に当たると

ドカン！！

軽く爆発を起こした。

真

「つてええ〜！！」

ハヤト

「大丈夫だ。加減したから死んでねえ」

とは言つてもねえ黒焦げになってるからねえ

〜数分後〜

さすがにあれ見せられて意見する人いないよな

朝倉

「はいはいコスプレレストランがいいと思います〜す」

朝倉！？つかコスプレレストランってなんだよ！？普通喫茶店だろ？  
？というか女子ってコスプレ嫌いじゃないのか？

ハヤト

「よし、いいぞ」

つてハヤト先生ええ〜!? オツケーしちやっていいんですか!?

クラス男子2

「賛成〜」

クラス女子1

「私も」

カエデ

「面白そう」

うわっ賛成者続々登場!? つかカエデ、一国のお姫様でしょうが!  
!というカエデのせいでみんな賛成しちやってるじゃん!!

ハヤト

「よし、このクラスはコスプレレストランに決定だ!!」

うわぁ〜やりたくないのに決定なっちゃったよ。

朝倉

「ちよつと理名ちゃん」

理名

「何?」

朝倉

「あのね……」

なんだ朝倉が白宮に耳打ちしてっけどなんか寒気が

白宮

「オツケーオツケー最近、呪式系統の専門書で見つけたよ ナイス  
アイディア」

朝倉

「でしよ〜」

何を企んでいるんだ二人は？と不安になった。  
どうなるんだろう文化祭？

続く

## 20 文化祭準備にて

クラス女子1

「この味付けはどうですか？」

ど〜も黒宮真です。今、家庭科室でクラスの女子達に料理を教えています。なんでもクラスの女子達は全然料理ができないらしく、料理が出来る俺と影美が教えることになった。俺は小4で一人暮らし始めたから料理は最低限、店で出しても恥ずかしくないレベルだからいいとして

クラス女子2

「影美ちゃんこれどのくらい焼くの？」

影美

「きつね色になるまで。ああ〜そこ塩じゃなくてこしょうだよ!!」

影美、何故そこまで料理がうまいんだ？教え方もいいし、6歳だよね？

影美

「お父さん」

真

「どうした影美？」

影美

「ここ影美に任せて、お父さん教室見に来ていいよ」

真

「でもな」

大丈夫なのかな？

影美

「大丈夫、大丈夫」

と影美から家庭科室を追い出された。

しょうがない教室見に行くか。

〳〳数分後〳〳

で教室にきた俺だが、

真

「凄いな」

教室はとても綺麗に飾り付けされていた。

アレン

「あつ黒宮さん」

真

「アレンか。飾り付け、凄いな」

アレン

「僕とカエデ様でした。」

真

「二人で？」

アレン

「はい。後の人達は服を作っています。」

確かに女子は針仕事してるし、エド達は錬成で服を作ってた。

ちよつと挨拶するか。

真

「よっ」

エド

「おう、黒宮の旦那、」

真

「それ服か？」

エド

「そつだ。俺ら男子担当だ」

と作りたてのタキシードを見せるエド。

なぜタキシード？まあコスプレというからいつか。

エド

「で黒宮の旦那に聞きたいことがあるんだが」

真

「なんだ？」

エド

「白宮のアネゴから俺用に設計してもらったやつ錬成したんだがこれなんだ？」

と見せたのは、

学ラン！？白宮、何を作らせてんだ！？まったくつか説明してやれよエドに

真

「本人に聞いたらどうだ？」

エド

「いやっ／＼／＼というか白宮は何人引き連れて実験室に行ったんだよ」

実験室？何しに行ったんだ白宮。

～～数分後～～

で実験室に来たんだが、

真

「何してるんだ？」

理名

「客寄せの秘策よ」

白宮は魔方陣の上にフラスコを置いて、なにやら呪文をいいながら材料らしきものをフラスコに入れている。確か呪式系統だけ魔法薬

を作る際、呪文が必要だっけ。

真

「他のやつらは？」

理名

「材料探し。この薬、材料がとてつもなく多いから。」

なんだこの背筋が凍るような感覚は！？本能的に何かを拒否してる。  
なんだこれ。

と不安が募ってきた。余談だが後で、家庭科室に戻ったら、影美以外の人達はなぜか疲労困憊していた。  
なぜだろう？

続く

## 21 文化祭一日目にて

鏡に写るのは……

ど〜も〜黒宮真です。ようやくきました文化祭の日。朝目覚めて、顔洗おうとして洗面所に行ったら

真

「誰？」

鏡に、可愛い女子が写っていた。腰ぐらいまである黒髪。愛らしいパッチリ黒目。……って鏡の前にいるの俺だよな？ 一応手を振ると鏡の女子を振る、恥ずかしいけどウインクすると鏡の女子も恥ずかしそうにウインクする。ってこれってまさか

真

「し〜ろ〜み〜や〜!!」

理名

「呼んだ？」

〜〜数時間後〜〜

白宮の話によるとあのコスプレストランの提案した時、クラスの女子連中よりも可愛い顔をしてる俺を女にできたらいいのにと朝倉が白宮に耳打ちしたら、最近呪式系統の専門書で『性別転換薬』というものを見つけたらしく昨夜俺が寝てる時に注射したらしい。で文化祭は3日間あるらしく

真

「で薬の効果は3日あると?」

白宮

「そついうこと。ってその服装……」

今現在進行形で着てるといつか白宮に着せられているのはエプロンドレスに頭にヘッドドレス、髪は長いと思うがポニーテール。人から見ると

理名

「メイドかわいい〜!!似合い過ぎ〜!!こんなメイドにお世話された〜い!!」

真

「わっ!!抱きつくな!!だいたいお前をお世話したくねえ!!と  
いうかお前アキバ系!?!」

そつ、メイドの格好である。

アレン

「本当に黒宮さんですか?」

アレン、言いたくないが俺だよ。ちなみにアレンはセーラー服である。(絶対白宮の発案だな)

カエデ

「それフリーディア家に仕えるメイドの服ですよ」

カエデ、この服やめて欲しかった。ちなみにカエデは自前のドレスである。

アイス

「かわいい／＼……」

アイス、素直に言わないで恥ずかしいから。ちなみにアイスは着物である。（似合っているが絶対白宮の提案だろ）

真

「でこの服装ってことは接客かよ。つか白宮チャイナ服かよ」

理名

「いいじゃない。後、絶対接客よ。クーちゃん」

真

「クーちゃん？」

理名

「愛称よ。私がリツちゃん。アレンちゃんがアーちゃん。アイスちゃんがフーちゃん。カエデちゃんが姫さまよ」

キャバクラかよ!?

理名

「では売り上げ100万ルク目指して頑張るぞ」

付き合いきれね

続く

## 22 文化祭1日目2にて

理名

「クーちゃん、野菜炒め出来たよ!!」

ど〜も黒宮真です。今、接客やってます。本当はやりたくないの  
だが現在進行形で女の子になってるからやるしかありません。

真

「お客さま、野菜炒めお持ちしました。」

客

「ありがとうございます」

まったく俺の性格には合わねえ。というかあれか拷問か？

理名

「アーちゃん交代」

なぜアレンが交代あんのに俺はないんだ。

真

「白っじゃなかったリッチちゃんなんで俺には交代ないんだ?」

理名

「だって可愛いから」

なんだその理由は!?

〜数分後〜

お客様、増えてきたな

客2

「おら隣座りやがれ!!」

あゝあやっぱりこつこのいるんだよな

アイス

「やめて」

ってアイス!!

真

「お客様、当店はそういうのは禁止です。即刻でていってください」

客2

「いいじゃねえか。おつ、お前もべっぴんじゃないか。」

ぶちっ

真

「『水蛇豪流列破』」

と客に水の蛇を放ち、壁にぶつける。一応手加減したから死んでないよな？

客2

「このアマアア!!」

うわっ逆ギレかよ。たく、この格好で黒宮真だと気付かれないし、けどなあゝ待てよ誰にも水蛇豪流列破見せてないからばれてな

いし水の魔法を使えばいいか。

客2

「おらっ！！」

魔法使わねえのか

真

「『水連斬弾破』」

と手のひらに水を集め、ある程度集まったら客に放つ。放ったら水が分裂し、客に何発もあたり、切り刻む。

〜数時間後〜

で俺が退治してから店に変な輩がこなくなり店は繁盛し始めた。

理名

「はい、今日の営業は終了です。」

やっと終わった。つかいろんな意味で疲れた。

理名

「では今日の売り上げは発表です。」

どんだけあんだろ？

理名「75万ルクです。」

おお、結構あるな。こんだけあんなら

真

「白宮、明日休んで文化祭見に行っていないか？」

理名

「いいよ。けどこれ持っててね」

と白宮が看板をだしてきた

真

「まあそのくらいなら」

白宮

「あと2日目からある武闘会にでてね」

真

「はああああ！..！」

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9256h/>

---

異世界に刃物少年がやってきた

2010年10月9日04時49分発行